

# フットパスによる道南地域の土木・産業遺産の 活用に関する現状と課題

(独) 土木研究所 寒地土木研究所 道南支所 ○北谷 沙紀子  
同上 道南支所 光野 昭宏  
同上 地域景観ユニット 福島 秀哉

北海道総合開発計画において「国際競争力ある魅力ある観光地づくり」が主要施策とされ、「北海道の自然環境を生かしたフットパスの整備」などが謳われ、社会資本整備においてもこれらへの貢献が期待されている。

一方、地域資源の有効活用による観光振興の観点からみたととき、地域には土木・産業遺産が少なからず存在しているが、現状では十分に活用されていない事例も多い。

本報告は、フットパスを有効なツールとして、函館市及びその近郊に多数存在する土木・産業遺産を地域・観光振興に活用する視点から、その現状と課題について報告するものである。

キーワード：土木遺産、フットパス、観光、地域活性化

## 1. はじめに

函館市は函館山からの夜景、異国情緒な街並み、イカを始めとする豊富な水産資源を有し、年間 430 万人もの観光客が訪れる全国有数の観光地である。また、2015 年に予定されている北海道新幹線開業を控え、函館市では、観光客にとって魅力あるまちづくりを進めているところである。

しかしながら、2009 年には(株)ブランド総合研究所<sup>1)</sup>による「第 4 回地域ブランド調査」において、魅力度ランキング第 1 位を獲得したにもかかわらず、函館市が発表した「平成 21 年度来函観光入込客数推計<sup>2)</sup> (図-1)」によると、前年度に比べ約 23 万人 (5.0%) の減少となっており、平成 13 年度のピーク時 530 万人に比べ約 20% も減少している状況である。

このように函館の観光は、イメージとしては高く評価されているが、近年は観光客の減少傾向がみられる。そ

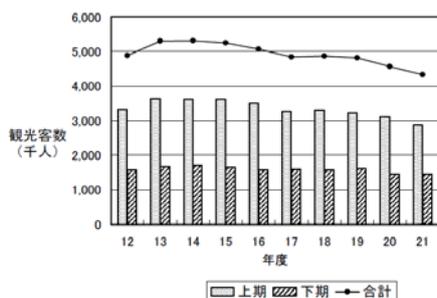


図-1 函館市の年度別観光入込客数の推移<sup>2)</sup>

のため、今後はこの知名度を活かして、リピーターや滞在時間を延ばすことが重要であり、それにつながる新たな魅力の向上が求められている。しかし厳しい財政状況の中、新規投資は難しく、今ある地域資源の活用が期待される。

こうした中、道南地域には歴史的価値が高く魅力的な土木・産業遺産が多数存在する。しかしながら、多くが離れて点在し、アクセスもしにくいことなどから十分に活用されていない現状がみられる。

一方、近年、環境や健康志向から地域資源を活かしたフットパスへの需要が高まってきている。このことから、限られた予算の中で既存の土木・産業遺産を活かした効果的な地域振興策として、フットパスが有効なツールになると考えられる。(ここでフットパス<sup>3)</sup>とは、イギリスを発祥とする「昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【path】」のことである。)

本報は、こうした状況を踏まえ、函館市及びその近郊都市にある土木・産業遺産を紹介するツールとして、フットパスを利用し、地域資源を有効に活用するための現状と課題について整理するものである。

## 2. 土木遺産について

土木遺産<sup>4)</sup>について土木学会は以下のように述べている。

「私たちの暮らしを支えている社会基盤施設には、橋梁、道路、鉄道、ダム、堤防、防波堤さまざまなものがある。

その中でも、近代以降、近代工学技術によって造られてきた施設が土木遺産である。土木遺産は、先人の創意、工夫や意思決定を現在に伝えるだけではなく、未来にも伝えるもので、過去・現在・未来の三者の対話に欠くことのできないものである。そして、過去の行いを振り返り、反省することで、新たな社会基盤整備に向けての参考となるものが土木遺産である。」

また、平成12年に設立した土木学会選奨土木遺産の認定制度<sup>5)</sup>では、土木遺産の顕彰を通じて歴史的土木構造物の保存に資することを目的とし、その結果、(1) 社会へのアピール (2) 土木技術者へのアピール (3) まちづくりへの活用 (4) 失われるおそれのある土木遺産の救済などが促されることを期待している。

したがって、フットパスを有効なツールとして、道南地域の土木遺産を活用することは、観光・地域振興はもとより、土木遺産の認定制度が期待しているものともつながるといえる。

### 3. 函館を訪れる観光客のニーズ

函館市が平成21年4月から平成22年3月に、函館市内の観光ポイントで2420人の観光客を対象に実施したアンケート調査の結果<sup>6)</sup>では、旅行地として函館を選んだ理由に「歴史的建造物」という回答が全体の67.7%となっており(図-2)、観光客の歴史や遺産に対するニーズが高いことがわかる。また、交通・宿泊先の手配の方法としては、「個人で手配」や「フリープラン」による個人旅行が全体の84.6%となっている(図-3)。これらのことから函館の土木・産業遺産をフットパスでつなぐルートを示すことは、歴史に関心のある個人旅行者に対するニーズにかなっていると考えられる。

また、訪問した観光地、また行く予定の観光地という質問では「函館山、元町周辺、ウォーターフロント」という回答が8割を超え(図-4)、観光客の大半が西部地

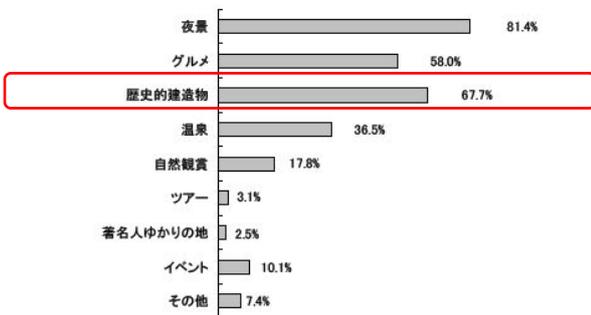


図-2 旅行地に函館を選んだ理由<sup>6)</sup>



図-3 交通・宿泊先の手配<sup>6)</sup>

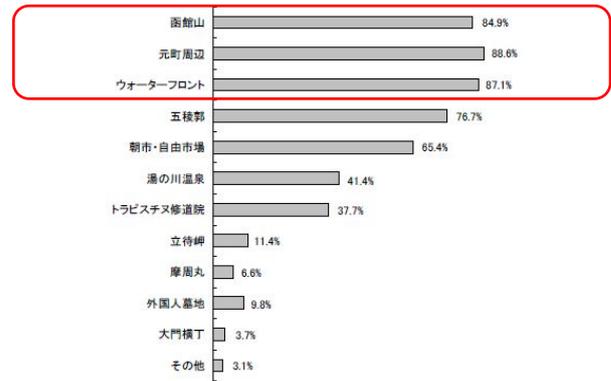


図-4 函館の観光地で行った また行く予定の観光地<sup>6)</sup>

区の市内有名観光スポットを訪れている。よって、特に西部地区に点在する遺産を対象とすることで、より効果が期待できる。

### 4. 函館の土木遺産と活用の現状

現地調査から得られた知見をもとに、函館の土木遺産の魅力と、地域資源の活用の観点からみた課題について以下に述べる。

「土木学会選奨土木遺産」「日本の近代土木遺産」などの資料<sup>7)</sup>を参考に整理した、道南地域の土木・産業遺産の位置を図-5に示す。



図-5 主な遺産の位置を示した図

以下に代表的な函館の土木遺産について紹介する。

#### (1) 旧戸井線アーチ橋<sup>8)</sup>

戸井線は、汐首岬に設置されていた津軽要塞への兵員

輸送や物資の補給のため昭和12(1937)年より建設が始まった軍用鉄道である。戦時下の物不足の最中での難工事であり、特に鉄不足のため「木筋コンクリート」橋であったと言われている。昭和18(1943)年、戦況の悪化に中断し、工事は再開されることのない「幻の鉄道」となった(写真-1)が、そのスケール感やアーチの美しさ、歴史性などからその魅力を活かした活用により、将来の十分な観光資源となり得る可能性がある。

しかし、現地には車のアクセスに限られるが、駐車場はなくアクセスが難しい。また、現在地を示した案内板(写真-2)のみで、旧戸井線に関する説明看板はなく、この施設の価値、歴史的背景などを現地からうかがい知ることはできない。このように魅力的な地域資源にも関わらず有効に活用できていない状況にあるといえる。



写真-1 旧戸井線アーチ橋



写真-2 旧戸井線アーチ橋案内看板

## (2) 函館漁港船入潤防波堤

船入潤防波堤は、北海道の港湾工事としては初めて国費助成を投じて明治32(1899)年に完成した構造物であり、近代港湾整備の父といわれている廣井勇博士の調査・設計に基づき、防砂堤、防波護岸、船揚場とともに整備された、「函館港改良施設群」として土木学会選奨土木遺産2004に選定された(写真-3)。防波堤の構造<sup>9)</sup>は、石積とコンクリートを使用した練り積み構造で、土台に使用した日本人の製作によるコンクリートブロックとともに、当時、他に類のない画期的なものであった。また、石積みには、弁天台場の取り壊しにより発生した関知石を使用し、石畳を思わせる美しい仕上がりを見せている。しかしながら、観光客向けのガイドマップ等に記載されていないことはもちろん、あまり認知されておらず、十分にその魅力が活用されているといい難い。



写真-3 函館漁港船入潤防波堤

このようにいくつかの事例をあげただけでも、道南地域の土木・産業遺産は、その魅力と歴史的価値により、十分地域振興に寄与する資質を有していると考えられる。

## 5. 函館のフットパスルート

ここでは、函館観光におけるフットパス(歩くこと)を活用した観光・地域振興の現状について調査した結果から、観光客の「歩く観光」に関するニーズや、土木・産業遺産を活かしたフットパスに向けた課題を整理する。

### (1) てくてくはこだて

函館市内の観光ボランティア団体が、観光客等を対象にした元町地区の散策をサポートする「はこだて街歩きガイド『てくてくはこだて』」(函館観光コンベンション協会主催)を実施している(図-6)。てくてくはこだては、観光客へのサービス事業の一環として2年前から実施され、平成22年度は「愛」、「一會(いちえ)の会」、「愛NO.1」の3団体が案内役を担当している。

著者らは、昨年5月に『てくてくはこだて』に参加し、調査を行った。当日は、丁寧な解説により、函館市の歴史や各建造物の歴史などを学ぶことが出来た。

また、「てくてくはこだて 秋の特別版」は、より深く函館のまちの魅力に触れてもらうため、まちあるきコー



図-6 てくてくはこだてコースマップ<sup>10)</sup>

スをガイド付きで楽しむものであり、歴史を知り、人と触れあう参加・体験型のイベントである。

函館市が平成22年9月23日から平成22年9月26日の4日間で「てくてくはこだて 秋の特別版」の参加者を対象に実施したアンケート調査の結果より、「まちあるき」についての満足度が56.3%、まあまあ満足を加えると92.6%と高い満足度であった(図-7)。このことから、函館市では歩いて観光すること(フットパス)のニーズが高いことがわかる。

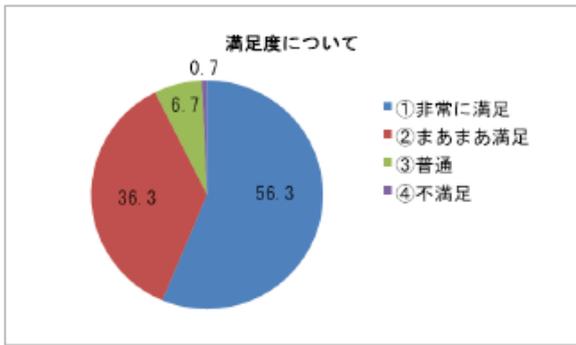


図-7 満足度について<sup>11)</sup>

## (2) 函館まちあるき (18 コース)

図-8は函館市観光コンベンション部観光振興課が、平成22年度に発行したマップである。函館の観光資源である歴史的建造物や函館にゆかりのある人物ペリーや高田屋嘉兵衛にちなんだ観光コースがある。対象施設の解説、コースの所要時間・距離・消費カロリー、写真撮影ポイント、お食事処やトイレの位置を記載している。そのため、観光客に重宝される情報が満載である。函館市は、観光客に名所散策を楽しんでもらう「まちあるき観光」に力を入れており、地域資源を有効に活用するための新しい体験型の観光ルートを発掘している。今後、さらに、25コースまで増える予定である。

しかしながら、「函館まちあるきマップ」の中にも土木・産業遺産をテーマにしたコースはない。「箱館はじめて物語コース」の中でも、最古のコンクリートである函館漁港船入潤防波堤、道内初の下水道施設などの土木・産業遺産は紹介されていない。

このように歩く観光に対するニーズは高いものの、既存のルートの中に土木・産業遺産は組み込まれていないという現状を確認した。



図-8 函館まちあるきマップ<sup>12)</sup>

## 6. 函館の土木・産業遺産のルートの提案

そこで、道南地域のフットパスを通じた遺産活用による観光・地域振興に向けて、具体的なルート選定作業を通じてその課題や留意点の把握を行った。

提案するルートでは、一般観光客及び土木技術者や土木技術者を目指す学生を対象とした。また、3章の図-3の結果から、観光に対してより効果的と考えられる「函館山、元町周辺、ウォーターフロント」周辺の西部地区を対象地とし、現地調査の結果などから以下の図-9に示す施設を選定して、マップを作成した(図-10)。

1	函館漁港船入潤防波堤
2	道内初の下水道
3	石積岸壁
4	旧栈橋
5	七財橋
6	日本最古のコンクリート電柱
7	市電操車塔
8	東北以北最古のエレベーター
9	東本願寺函館別院
10	元町配水池
11	白川橋 (函館公園)
12	日本最古の観覧車
13	赤松並木
14	笹流ダム
15	五稜郭
16	旧戸井線アーチ橋
17	函館要塞

図-9 対象施設



マップの構成は、A3 中折りの両面とし、各施設を紹介するにあたり、現地に詳細な説明看板があるものはマップ上の説明を簡潔に、現地に説明看板の無いものはマップ上の注釈で解りやすく解説するように作成した。また、当時の海岸線と比較できるように、明治時代の古地図上にフットパスルートを記入した。因みに海岸線の埋立地以外は、ほとんど当時のままであり、歴史を感じながら、歩くことができる。

また、マップの中身には、歩く際の危険箇所の注意喚起や、ビューポイントの位置と方向を示し、おすすめの景色をコメント付きで記載している。3章の図-2にあるとおり、旅行地に函館市を選んだ理由として、「歴史的建造物」との回答が多かったので、市が選定している景観形成指定建築物<sup>13)</sup>の位置もマップ上に記載している。

## 7. まとめ

- ①函館市及びその近郊には、魅力的な土木・産業遺産があり、これらは観光・地域振興への活用が期待できる。
  - ②しかし、多くが点在し、アクセスもしにくいことから、十分に活用されていない。
  - ③一方、函館においても「歩く観光」に力を入れており、フットパスを活用した新しい観光ニーズがある。
  - ④そこで、実際のルートの選定を行ったところ、フットパスで上手くつながぐことで、土木・産業遺産が十分に資源となり得ることが分かった。
- 今後、地域の遺産の活用にあたっては、以下を留意する必要がある。

- ・土木・産業遺産の資料調査から、函館では、日本最古・現役最古であるといった貴重な遺産があるように、地域特有の遺産があることを把握すること。
- ・現地調査等から、歴史的背景や価値が示された現地説明看板が必要であること。又は、マップにそれらの施設の説明を記載すること。
- ・ルート選定やマップ作成を通じて、歩道がない所、横断歩道がない場所での道路横断などの安全面に対する配慮。
- ・マップ作成にあたっては、限られたスペースの中で必要な情報量を取捨選択し分かりやすく表現する、といった課題が挙げられる。

また、土木遺産を社会教育の教材として活用したり、修学旅行で活用するなどの、子供達が学ぶ機会を増やす工夫も必要である。

さらに、先人達の時代背景や設計施工の変遷なども研究し、後世に伝えることは、土木関係者に課せられた課題であり、土木遺産をいかにアピールし、活用するかということが今後の課題である。

## 8. おわりに

今後は、施設の説明看板設置へのアドバイス、ルートの体験会及びそのアンケート調査を行い、函館土木・産業遺産フットパスマップのフォローアップを進めたい。

近年、エコツーリズムという考え方が普及してきており、自然環境や歴史文化を対象に、それらを体験し、学ぶことによって、住民が地域に誇りをもち、自然環境や文化資源に対する価値が向上している。よって、土木・産業遺産についての観光ニーズは、地域に対する愛着や歴史的建造物に対する認識を深めることによって、今後ますます高まるものと思われる。

道南地域には、多数の土木・産業遺産等が眠っている状況にあり、今後利活用が進むよう期待したい。

### 参考文献

- 1) [http://www.tiiki.jp/corp\\_new/index.html](http://www.tiiki.jp/corp_new/index.html) (株) ブランド総合研究所
- 2) 平成 21 年度来函観光入込客数推計(函館市観光コンベンション部観光振興課)
- 3) 鳥谷部寿人、村上泰啓、高田尚人：地域資源を活用したフットパスに関する考察 2009
- 4) [http://www.jsce.or.jp/branch/hokkaido/\\_contents/heritage/index.htm](http://www.jsce.or.jp/branch/hokkaido/_contents/heritage/index.htm) (社) 土木学会北海道支部
- 5) <http://www.jsce.or.jp/committee/doboku-isan/isan.shtm> (社) 土木学会
- 6) 平成 21 年度観光アンケート調査の結果(函館市観光コンベンション部観光振興課／(社) 函館国際観光コンベンション協会)
- 7) 対象施設については以下を参考にした。
  - ・「土木学会選奨土木遺産」「日本の近代土木遺産」社団法人土木学会
  - ・「地域を支えてきた土木施設～土木遺産～」北海道開発局函館開発建設部
  - ・「北海道遺産」北海道遺産構想推進協議会
  - ・「北海道文化資源データベース(産業遺産・史跡)」北海道くらし安全局道民活動文化振興課
  - ・「北海道におけるコンクリートの歴史」社団法人日本コンクリート工学協会北海道支部
- 8) <http://www.hk.hkd.mlit.go.jp/deji/history/index.html> 函館開発建設部
- 9) <http://www.gyokou.or.jp/100sen/100kekka.htm> 社団法人全国漁港漁場協会「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」
- 10) <http://www.hakodate-kankou.com/tekuteku/> (社) 函館国際観光コンベンション協会
- 11) 「てくてくはこだて 秋の特別版」の結果(函館市観光コンベンション部観光振興課)
- 12) [http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/kankou/hako\\_machi/index.html](http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/kankou/hako_machi/index.html) 函館市観光コンベンション部観光振興課
- 13) <http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/toshiken/design/> 函館市役所